12 2050年の春のある日

田上敦士 （株）KDDI 総合研究所／マルチメディア通信と分散処理研究会（DPS）

2020 年の初夏のある日

「2020 年の初夏のある日」というタイトルで，松下温先生が 30 年後の将来を SF 小説風に執筆なさいました．本誌 1991 年の 1 月号に掲載されたこの短編小説（と，あえて呼ばせていただきます）を 2020 年に読み返すと，SF っぽく感じないかもしれません．現在となっては「当たり前」の風景が描かれており，よくよく読むと，先見の明があられたのだと感心するばかりです．未来予想に対して「答え合わせ」を行うことは無粋と知りながらも，いくつかピックアップしていきたいと思います．本小説は，30 歳で会社員の A 氏の日常が描かれています．通勤風景である「電車には，IC カードで無人の改札口を通り」など，当たり前すぎて普通に流してしまいますが，執筆された 1991 年は JR 東日本が「磁気式の」プリペイド型乗車券のサービスを始めた年です．日本で IC カードの開発に初めて成功したのが 1982 年であり，クレジットカードに導入されたのは 2000 年頃です．A 氏はその後，会社も IC カードで入門しており，現在ではよく見る風景です．電車に乗った後，「A 氏は車内で，電子手帳を取り出し，今日のスケジュールをチェックし」ています．「電子手帳」という単語には少し懐かしさを感じますが，「スマートフォン」と置き換えると，皆さんのいつもの行動ではないでしょうか？ PDA（Personal Digital Assistant）という言葉が造られるきっかけとなったアップルのニュートンとシャープのザウルスの発売は 1993 年です．その他，サテライトオフィスでテレビ会議に参加したり，X 氏と，「曖昧なニュアンスの少ない領域」でしか実用されていない翻訳システムは使わずに，英語で話していたりします．この絶妙な近未来感は，ぜひ一読いただきたいものとなっています．個人的に卓越していると思うのは，「（奥さんは）掃除ロボットをセットするために，居間の家具を所定の位置に戻し，新聞や雑誌をかたづけたのち，ボタンをオンにした」の文です．「掃除ロボットのために部屋を掃除する」という一見矛盾した行動を，30 年前に予想されているのは，先見の明があるのか，ロボットと人間の関係について，基本的なところは 30 年経っても変わらないものなのか，考えてしまいます．

さて，私に与えられているお題は，「2050 年に向けての予想」をしないといけないことです．これはなかなか難しいチャレンジですが，やってみましょう．

2050 年の春のある日

過ごしやすい陽気のある春の日，B 氏は電車を待っていた．近年，オフィスワークに関しては場所を選ばなくなっており，在宅勤務や遠隔勤務が普通となってきている．ネットワークに繋がってさえいれば，どこでも仕事環境を整えられ，適切な設備さえあれば，仮想現実空間上に Face-to-Face とほぼ同じ環境を構築できるからである．しかしながら，築年数が決して浅くはない B 氏の家には籠もって仕事を行える書斎などはなく，子供たちが巣立つまではと，近くのサテライトオフィスに通勤している．コミュニケーション手段が豊富になって便利になったとはいえ，実際に会って話す重要性は失われていない．昨晩，新しいメンバの歓迎会を兼ねて久しぶりにプロジェクトメンバと直接会話した B 氏

は，飲みすぎたことを少し後悔しつつ，話題になったことについて考えていた．

接客業の遠隔勤務は難しいと言われているが，美容師の遠隔ロボットが出てきているらしい．確かにお客は座っていて動かないし，遠隔医療ロボットの応用と考えれば納得はできる．課題としては，人材育成的部分で，マニュアル化が難しい「見て盗む」部分が遠隔だと難しいらしい．いっそのことAIでいいのではないかとB氏は言ったが，周りからは反対された．AIに刃物を当てられるのは怖いとか，気心知れた美容師との会話がないといった理由であった．残念ながら，「痒いところはありませんか？」と聞かれても返事に困る程度のB氏には，いまいちピンときていなかった．

そんなことを考えていると，乗るべき電車がやってきた．ナビゲーションは精度がよくなり，出張や外出のときだけでなく，日常でも乗り過ごし防止などさまざまなサポートをしてくれる．B氏は，電車の中でプロジェクトごとに分類されたメッセージをチェックした．位置の束縛がなくなると，組織という枠組みも緩くなり，複数のプロジェクトに属して仕事をするというスタイルになっている．そのうち会社という組織もなくなると言われているが，経理や税務といった法的な課題が追いついていないだけで，実質的には緩くなっていると感じる．

プロジェクトのミーティングが遠方で決定していた．B氏はミーティングの予定を入れるとともに，会議室までのチケットのリクエストを出した．すぐに飛行機と自動運転タクシーの組合せを提案され，念のために料金と二酸化炭素排出量などから算出される環境負荷値が規定を超えていないか確認し，発券申請を出した．ワンストップですべての発券があるので楽である一方，経理にすべての行動が筒抜けになってしまうのには，いまだにわずかながら抵抗感はある．とはいえ，デマンドも把握することで，高精度になった渋滞情報などメリットが多いのも事実である．

さらにB氏は，夕方からの海外とのミーティングの資料を確認した．通信技術がどんなに発達しても残念ながら時差は解決できず，遅い時間のミーティングとなってしまう．最近では，簡単な調整であればパーソナライズされたAIにまかせても大丈夫な感じではあるが，細かい事案は，時間を合わせてミーティングを行う必要がある．

最寄り駅についたB氏は，あたたかな春空を見上げた．そういえば，長男が修学旅行で宇宙旅行に行くと楽しそうに話していた．宇宙旅行といいつつ成層圏を少し超える程度であるが，身近になったものである．昨今，いろいろなものが擬似体験できる時代になってしまったが，やはり実体験には代えがたいものである．B氏は，今度の休みに久しぶりに家族旅行でも行こうかと，思いをめぐらせていた．

春の朧

勘の良い人は気づいたかもしれませんが，前章では，エンド端末やユーザインタフェースは明記していません．B氏がスマートフォンを持っているのかARグラスをつけているのか，キーボードを打っているのか，音声入力なのか，脳波入力なのかもぼやかしています．読んだ人が「将来予測」を「補完」して読むことでこの文章は完成します．文字媒体であることを利用した「ずる」ですが，どのような将来像が思い浮かんだでしょうか？　2050年にこれを読んだ人が，どんな「補完」をするのか，楽しみでもあり，少し怖くもあります．

(2019年12月16日受付)

■田上敦士（正会員）　tagami@kddi-research.jp

1997年九州大学大学院システム情報科学研究科修士課程修了．同年KDDI入社，以来，トラフィック計測，将来インターネットに関する研究に従事．2018年よりDPS研究会主査を務める．博士（工学）．